

第6章 烏帽子形城における曲輪の特性と歴史的評価

第1節 はじめに

ここでは、第3章で報告した事実関係の整理と考察を行い、本城についての歴史的評価を行いたい。この際に、本城の特徴をなす横堀・土塁、瓦葺建物等の城郭を構成する要素や、発掘調査の結果明らかになった改修の痕跡、文献史料に残された豊富な記録に関して地域内における他の城郭との比較の中で検討を行うこととする。

第2節 研究史

烏帽子形跡については、戦前において刊行された『大阪府全志』で楠木正成によって築城されたことと、その後両畠山氏の抗争の舞台となったことが紹介された（井上1922）。その後、『日本城郭全集』9、『日本城郭体系』12においても紹介がなされ中世城館として広く知られるようになった。このような中、村田修三氏は烏帽子形城に対して初めて縄張り図の作成を行い、基本形が「コ」の字状を呈し、二重に空堀がめぐることが指摘し、基本構造、城域の確定を行った（村田1987）。この翌年に行なわれた発掘調査では、瓦葺と考えられる礎石建物が検出され、また発掘調査に伴い測量図が作成されるなど、本城を検討する上での基礎資料の蓄積が行なわれた。平成10年・平成11年には、河内長野市城郭調査会が河内長野市域の城館の踏査を行い、市内の他の城郭との比較検討が可能となった。これにより、曲輪に横堀を巡らす点が他の城郭に見られない特徴として指摘されている（中西2001）。また、当該調査に参加した中井均氏はそれまで別個の曲輪とみなされていた曲輪Ⅰと曲輪Ⅱについて、前者を後者の上に築造された土塁と考えた。また、併せて捨て曲輪の存在、谷筋が登城口となることも指摘している（中井2001）。

平成18年以降は、本市教育委員会による継続的な範囲確認調査が行われ、改修の痕跡・堀内障壁の存在等が確認されている。一方で、平成19年には大阪府教育委員会による南河内地域の中世城館の悉皆調査が行なわれた。これによって広域での比較検討が可能となった。

第3節 立地上の特徴

本城は、紀伊と河内・和泉を隔てる和泉山系から北に派生した尾根の先端部分に位置し、本城の西には石川が、東には石川の支流である天見川が流れており、本城の北で合流している。したがって、南を除く北・東・西の3方向は河川及びこれらの河川によって形成された河岸段丘崖によって平地部と遮断されている。また、南に続く尾根については、本城の南において谷筋が走っているため、本城の位置する丘陵は独立丘陵状を呈している。た

だし、急峻な切岸がみられる北側に対して南側は谷底部から曲輪までの高低差が少なく、防御の面では弱点であった事が考えられる。

なお、本城は急峻な丘陵頂部に位置するものの、平地からの比高差は、比較的少なく東側の天見川段丘面から66m、北側の石川段丘面から58mとなっている。このような平野部に近接するという本城の立地は、高野街道に接して立地していることとも併せ本城の交通網の管理という役割も担っていたことが推定できる。なお、本城からの眺望は、北側にむかって広がっており、南河内を一望でき、富田林市の嶽山城や金胎寺城など同時期に機能し、本城とともに同じ合戦で使用された城郭群を見渡すことができる。

第4節 城郭構成要素について

横堀

本城郭では、「コ」の字状にめぐる横堀が存在しており、特に、東側・西側に関しては、土塁を挟んで二重に横堀がめぐっている。横堀の規模は、幅が10m～12mあり、曲輪の規模が比較的小規模であるのに対して巨大な横堀を設けている点に特色がある。南河内地域においてこのような横堀は平地城館や平城では認められるものの、本城のように丘陵上に位置する城郭では事例が少なく、他には、上赤阪城において城の南西隅角部に横堀を巡らす事例が知られているのみである（第48図）。

これらの横堀は、本城の最終段階の姿を示しているものであり、豊臣秀吉の命で天正12年（1584）に中村一氏が改修した時点の様子を示していると考えられる。中村一氏は、秀吉の家臣であり、国人ではない。また、烏帽子形城は周囲にある城郭とは構造上の違いが大きいことから、在地での城郭の発展の延長上に出現したものとは考え難く、国人層より上位権力の介入によって築城された山城とみることができる。

堀内障壁

本城の堀内障壁は曲輪Ⅱをめぐる堀D内で検出されている。堀底をさらに1.5mほど垂直に掘り下げ、堀底内に意図的に段差を設けていた。堀内障壁の検出地点は南から東へと堀幅を大きく変えながら直角に折れる屈曲部にあたり、横堀の構造上、重要な地点に構築されている。城の南東は緩斜面であり、このような弱点を補うために、土塁や横堀・堀切がめぐらされ、強固な作りになっていたことが従来指摘されていたが、堀内障壁の存在によって、防御性がさらに高められていたことがあきらかになった。

一般に堀内障壁とは敵の堀内での移動を制限し、敵に対しての攻撃を容易にするために堀内に設けられた施設の総称である。このような堀内障壁には、本城の例のように堀底に段差を設けたもの、堀に直交する形で堀内を畝で仕切る畝堀、畝が縦方向にも横方向にも発達し障子の棧のように畝で仕切られた堀障子がある。このうち畝堀・堀障子は関東地方の城郭に多く、特に静岡県三島市山中城や神奈川県小田原市小田原城など後北条氏が築城

した城郭に多い。このようなことから、後北条氏の築城技術と考えられてきた。また、これらの施設は平城の水堀内に設けられ、水位を保つ機能も併せ持ったものも多い。近隣の堀障子の事例としては、京都府京都市二条城、大阪府大阪市大阪城、大阪府大阪狭山市狭山藩陣屋跡、奈良県大和郡山市大和郡山城などがあげられるが、いずれも平城であり、本城とは様相が異なる。

一方、本城の堀内障壁は空堀内に段差を設けたものであり、後北条氏の影響は考えにくく、関東で発達した畝堀や堀障子とは別系統のものと考えられる。本城の類例としては、三重県津市峯治城、三重県伊賀市菊永氏城、三重県菰野町力尾城、愛知県西尾市西尾城があげられる。力尾城では丘陵をめぐる横堀内の堀底に、枘を段違いに配置したような堀底施設が見つかり、本城と類似した様相を示す。

瓦葺建物について

本城曲輪Ⅰからは、瓦葺建物が検出されている。検出された瓦には時期幅があるものの、最も古いものは14世紀のものである。しかし、これらの瓦の個体数は少なく、当該時期における瓦葺建物の存在を積極的に示すものではないと考える。一方で16世紀の製作技術によっている瓦も出土しており、本城で検出された礎石建瓦葺建物の建築年代を考える上で参考となると考える。これらの年代は、本格的に瓦葺建物が城郭建築に導入される安土城の築城時期に先行しており、我が国の城郭史の理解にとっても重要である。

なお、豊臣秀吉の根来攻めの際に行われた本城の修理の際に、本城に瓦葺建物が導入されたことを想定する立場から、本城で検出した瓦を寺院からの転用品として解釈し、本城で検出された瓦葺建物の年代を直接示すものではないとする見解もある（中井2001）。これに関して、近年の発掘調査と遺物の再整理によって明らかになったことは、本城では少なくとも2回の改修が行なわれており、瓦葺建物建築後16世紀後半にもすくなくとも1回の改修が行なわれていることである。また、出土した瓦にも14世紀～16世紀までの年代差が存在し、その型式も多様なものから構成され、再利用の可能性のある瓦が出土している。このような点からは、寺院等からの転用が行なわれた可能性が高まった。一方で、考古学的に確認できた16世紀の改修が、文献的に確認できる根来攻の際に行なわれた改修と同一のものであるとすると、この改修以前に瓦葺建物が導入されていたことが推察できる。また、曲輪Ⅰから出土した陶磁器が16世紀後半のものである点は、この事象と整合的である。

中世城館に瓦葺建物が導入されている事例自体が類例に乏しい。特に安土城以前に瓦葺建物が導入された可能性のある事例は、近隣において大阪府東大阪市若江城、同交野市私部城、同富田林市西大寺山城、京都府京田辺市田辺城でみられ、安土城に先行する時期の瓦が出土している。また、奈良県奈良市多聞城では、瓦が出土しており、ルイス・フロイスの『日本史』にも記述され、安土城築城以前に瓦葺建物が存在していた事が確認できる。

これらの事例からは、畿内地域の先進性を窺うことができる。織豊系城郭以外の城郭に瓦葺建物がみられる事例は、極めて少なく、全国をみた場合でも、これらの他に高知県高知市岡豊城、福岡県前原市高祖城、兵庫県三木市三木城で類例が知られているのみである（中井1990）。

第5節 改修痕跡と城郭構造の変遷

前節で指摘を行ったとおり、本城には改修が行われた可能性を示す痕跡がある。この点を整理すると次のようになる。

- A：曲輪Ⅰで上下2面の遺構面が検出されており、上層遺構面から瓦葺建物が検出されている。
- B：土塁④は、本来曲輪であった場所に新設されたものであり、かつ土塁④の下層に堆積した土からは瓦、16世紀後半の土器が検出されている。
- C：土塁⑤の断面で観察される盛土方法は、土塁④とは異なる方法によっている。かつ土塁⑤の盛土の中からは瓦が出土している。

これらの事実からは改修により曲輪Ⅰに瓦葺建物が建築されたこと、瓦葺建物が建築された後に少なくとも1回の改修が行なわれたこと、土塁④と土塁⑤の盛土方法の差が異なる時点での改修によって生じたものであると考えれば、瓦葺建物の建築後に2回の改修が行なわれたことを窺うことができる。これらにより城の変遷を4つの段階に区分することができる。

1段階：瓦葺建物が建築される以前。曲輪については曲輪Ⅰ・Ⅱ以外に、少なくとも1つの曲輪が存在した。

2段階：瓦葺建物が建築された時期。曲輪については曲輪Ⅰ・Ⅱ以外に、少なくとも1

第12表 烏帽子形城跡出土遺物の年代

調査年次	出土場所	遺物の名称	年代
昭和63年次調査	曲輪Ⅰ 第1～第3トレンチ	瓦（NH1）	16世紀中～後半
		瓦（M4）	（14世紀）
		瀬戸美濃焼天目茶碗	16世紀後半
		白磁端反皿	16世紀後半
		土師質羽釜	16世紀前半
	曲輪Ⅱ 第6トレンチ遺物包含層	青磁輪花皿	16世紀後半
		備前焼播鉢	（16世紀後半）
EBS05-4	土塁④下層	瓦質土器甕（鋤柄編年Ⅱ-3～Ⅲ-1）	15世紀中葉～16世紀前半
		土師質甕	16世紀第4四半期
		瓦（M4・M5）	（14世紀）
EBS06-1	土塁③遺物包含層	備前焼播鉢	16世紀後半
EBS07-2	堀D	白磁端反皿	16世紀後半
EBS08-1		瓦（NM1・M9・M6・M7）	14世紀前葉～中葉・14世紀前葉～中葉・14世紀前半・（14世紀）
EBS09-2			

*（ ）内は推定年代

つの曲輪が存在した。

3段階：土塁④が構築された時期。曲輪は曲輪Ⅰ・Ⅱのみとなる。

4段階：土塁⑤が構築された時期。

これに対して、本城から出土した陶磁器・土器は、15世紀中葉から16世紀後半までの時期幅がある。これは文献史料に登場する本城が使われていた年代とも一致する。文献史料の記載からも、少なくとも1回の改修の記載がある。これは、天正12年（1584）に豊臣秀吉の命により岸和田城主の中村一氏が行ったものである。この改修と発掘調査の結果明らかになった改修の痕跡を厳密に対応させることはできないが、土塁④は16世紀後半以降に築造されたものであり、土塁⑤はこれと同時期もしくは以降に築造されたと考えられるものであり、天正12年の中村一氏の改修によって最終的に現在みることのできる4段階の姿となったことが推定できる。

4章で行った南河内の内乱史の時期区分と本節で設定した烏帽子形城の変遷の対応を考えた場合、まず、烏帽子形城における2段階から3・4段階への変化は中村一氏の改修による可能性が強く、内乱史のⅤ期におきたといえる。1段階から2段階への変化については、本城の積極的利用が三好氏と畠山氏の抗争が行なわれたⅣ期に行なわれていること、瓦葺礎石建物が検出された遺構面に堆積した遺物包含層で出土した陶磁器・土器類の時期が16世紀後半のものであることから、Ⅳ期におきたと想定する。1段階の開始期については、本城の初出記事が文正元年（1466）であり、出土した土器で最も古いものが15世紀中葉であることから、Ⅰ期の初頭であると考えられる。

第6節 周辺城郭との比較検討

大阪府下には、『日本城郭体系』12で12456件、埋蔵文化財として把握されているもので233件の城郭が存在する。本城跡が存在する南河内地域は、大阪府下でも中世城郭が特に集中する地域となっている。また、南北朝、応仁の乱、戦国時代にわたって、大規模な戦場となっており、文献史料にも登場する城郭が数多く存在し、我が国の内乱史を理解する上で必要不可欠なものが多く存在している。当該地域では、2007年に行われた南河内地域の城郭悉皆調査で、106件の城館の存在が明らかになっている。

これらの中には、明確な曲輪や遺構が現状で確認できないものや、すでに宅地化によって破壊されたものも多い。この中で、埋没している城館を除けば、曲輪を有することが確認されているものは、19例存在する。この中には、すでに主要部が破壊されているもの（西大寺山城、高屋城）、陵墓や陵墓参考地となり立ち入りが困難なもの（丹下城、岡ミサンザイ古墳）、曲輪の状況が不明確なもの（小山城）も含まれている。

これらは、中心となる曲輪もしくは曲輪群を持ち周囲の尾根に沿って曲輪を配置する大規模なもの（金胎寺城、石仏城、上赤阪城、国見山城、千早城、二上山城、しょうぶ城）、中心となる曲輪の周囲に腰曲輪を配置する中規模なもの（平石城、猫路城）、小規模な曲

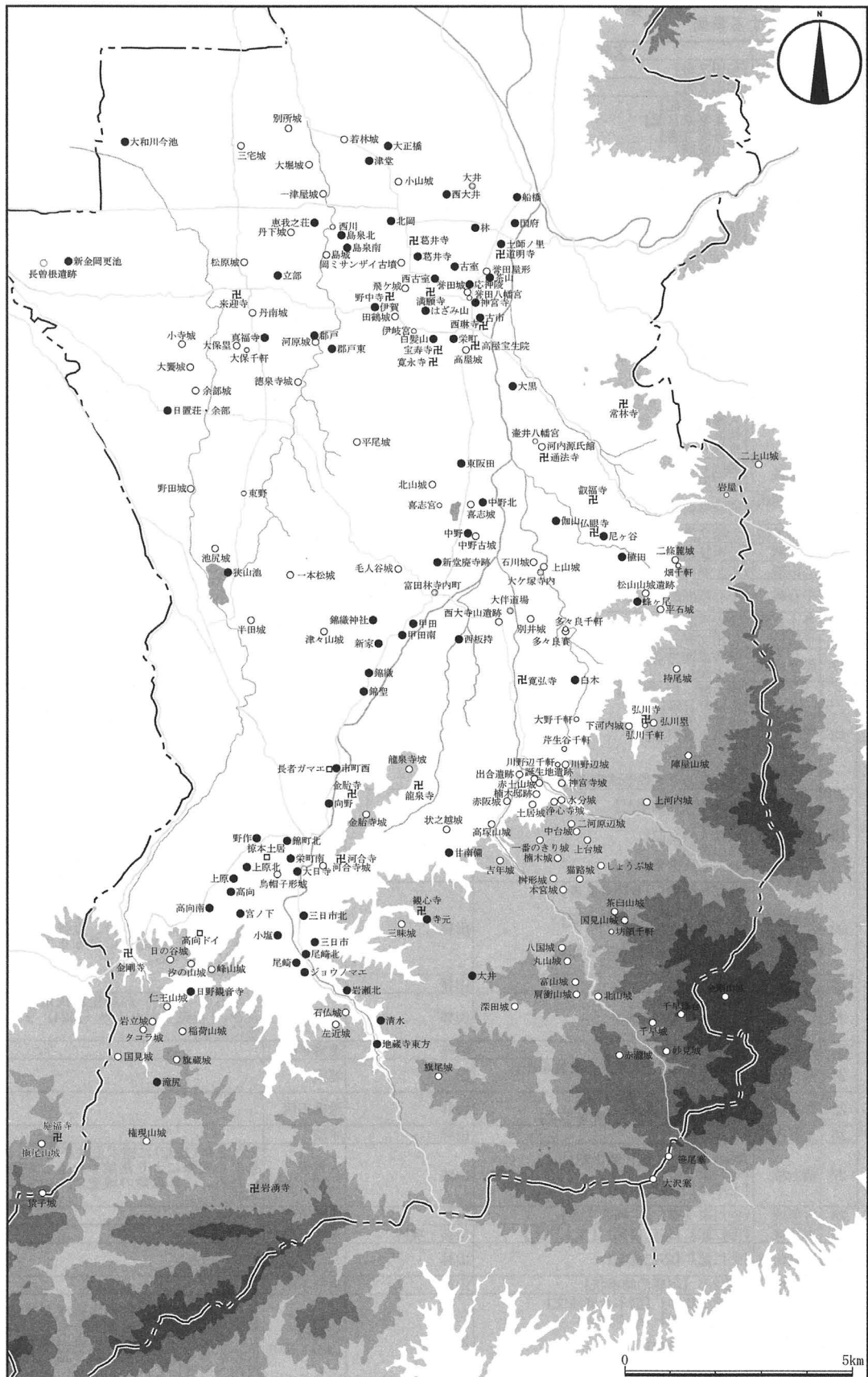
第13表 南河内城郭一覧（遺構が観察できる事例）
遺構が観察できる事例

	名称	所在地	種別	現状	築城年代	規模(単位:m)	曲輪の状況
1	丹下城	松原市	平城	陵墓	南北朝時代	大規模 (345×408)	宮内庁によって「大塚陵墓参考地」に指定されており、構造の詳細は不明。
2	小山城	藤井寺	平城	陵墓	室町時代	大規模 (450×430)	古墳の周溝を活用した濠が遺存。
3	岡ミサンザイ古墳	藤井寺	山城	陵墓	1492年以前	大規模 (280×370)	宮内庁によって「恵我長野西陵」に指定されており、構造の詳細は不明。
4	高屋城	羽曳野	平城	陵墓・宅地	室町時代	大規模 (800×400)	横堀・曲輪等が存在したが、現在、陵墓となっている中心部分を除いて消滅。
5	松山山城	太子町	山城	消滅	南北朝時代	中規模 (45×105)	発掘調査により曲輪・堀切・建物跡が検出。
6	平石城	河南町	山城	山林 (府史跡)	南北朝時代	大規模 (100×200)	山頂に主郭を設け、周囲に腰曲輪を配置する。防御施設として堀切が遺存。
7	西大寺山城	富田林	山城	宅地	14世紀前半～16世紀前半	中規模 (40×120)	尾根に沿って三つの郭を接続している。横堀・堀切が存在した。
8	金胎寺城	富田林	山城	山林	南北朝時代	大規模 (200×260)	中心部に主郭を設け、周囲にある複数の尾根に沿って曲輪を配置する。防御施設として、堀切、竪堀、切岸が遺存。
9	烏帽子形城	河内長野市	山城	山林	室町時代	大規模 (160×140)	方形の曲輪を配置し、周囲に横堀・土塁を設ける。主郭で礎石建物を検出。
10	石仏城	河内長野市	山城	山林	南北朝時代	大規模 (150×60)	主尾根に沿って曲輪を配置し、小規模な曲輪を派生させる。防御施設として、土塁・堀切が遺存している。
11	旗蔵城	河内長野市	山城	山林	南北朝時代	小規模 (50×50)	尾根に沿って小規模な2つの曲輪を接続している。防御施設として、堀切が存在する。
12	一番のきり城	千早赤阪村	山城	山林	南北朝時代	小規模 (80×30)	山頂部に小規模な曲輪を配置し、周囲に出曲輪を設ける。
13	楠木城	千早赤阪村	山城	山林 (国史跡)	南北朝時代	大規模 (280×260)	東西に2箇所を中心となる曲輪を設ける。これらの曲輪には、帯曲輪を付設する。さらに、これらの周囲に延びる複数の尾根にも曲輪を配置する。防御施設として、堀切、横堀・竪堀・畝状空堀群を配置。
14	しょうぶ城	千早赤阪村	山城	山林	南北朝時代	大規模 (700)	主尾根に沿って曲輪を配置し、主尾根から派生する尾根にも曲輪を配置する。防御施設として堀切が遺存している。
15	枅形城	千早赤阪村	山城	山林	南北朝時代	中規模 (100×50)	山頂部に曲輪を配置し、周囲に腰曲輪を設ける。
16	猫路山城	千早赤阪村	山城	山林	南北朝時代	大規模 (200×150)	山頂部に曲輪を配置し、周囲に腰曲輪を設ける。防御施設として、大規模な堀切を設ける。他にも不明確な曲輪がある。
17	国見山城	千早赤阪村	山城	山林	南北朝時代	大規模 (250×300)	中心部に3箇所の曲輪を配置し、周囲の複数の尾根に沿って曲輪を配置する。防御施設として、堀切、土塁が遺存。
18	千早城	千早赤阪村	山城	山林・境内 (国史跡)	南北朝時代	大規模 (300×400)	中心部に主郭を設け、周囲の複数の尾根に沿って曲輪を配置する。
19	二上山城	太子町	山城	山林	南北朝時代	大規模 (250×200)	中心部に主郭を設け、尾根に沿って曲輪を配置する。

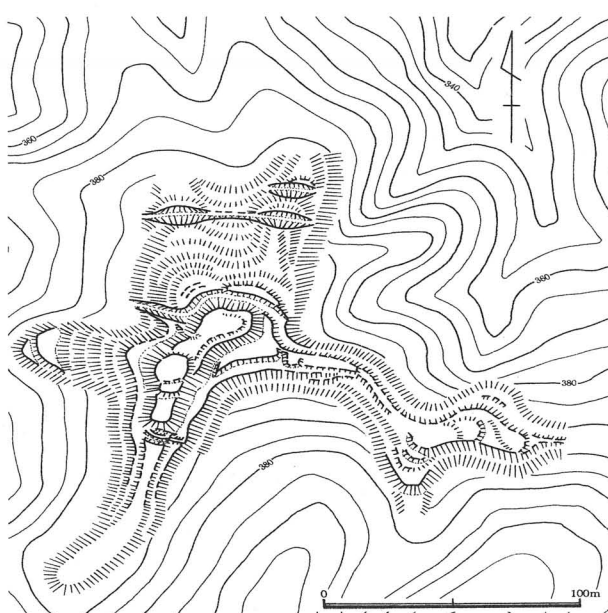
第14表 南河内城郭一覧（文献に登場する事例）

文献に登場する事例

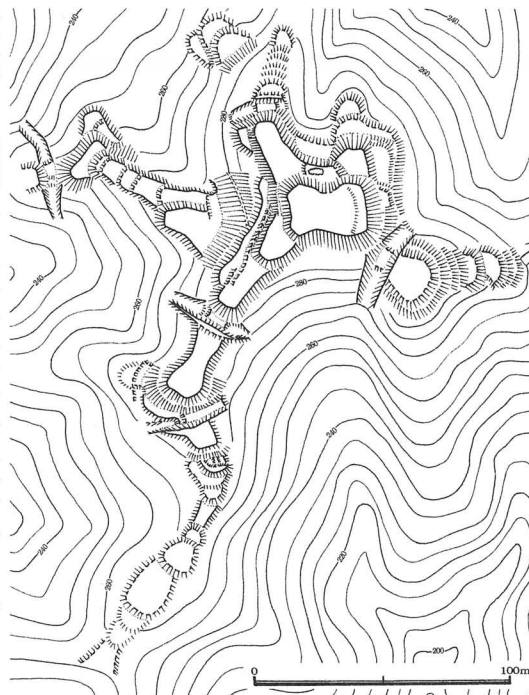
番号	名称	文献	現状	曲輪(単位:m)	
1	おいわい城	『和田文書』	境内	遺構不明	
2	池尻城	『和田文書』	宅地	埋没	
3	小山城	『細川両家記』 『二条宴集日記』 『三好家文書』 『畠山家譜』 『安見氏系譜』 『大乗院寺社雑事記』	陵墓	陵墓	安見氏の居城。永禄9年(1566)に三好笑岩に攻められ落城。元亀3年(1572)の織田信長の河内侵攻の際に、三好方の城として登場する。
4	鳥城	『畠山記』	田・畑	遺構不明	
5	岡ミサンザイ古墳	『後法興院政家記』『晴富宿称記』 『細川両家記』『足利李世記』 『多門院日記』『尋憲記』	陵墓	陵墓	
6	誉田城(屋形)	『尋尊大僧正記』 『後太平記』 『大乗院寺社雑事記』 『多門院日記』	陵墓	陵墓	文明11年(1479)に畠山義就による「新屋形の造営」の記事があり、以降に使用される。
7	田鶴城	『畠山家譜』	宅地	所在地未定	
8	高屋城	『尋尊大僧正記』 『後太平記』 『晴富宿称記』 『細川両家記』 『足利李世記』 『多門院日記』 『尋憲記』 『大乗院寺社雑事記』 『大乗院日記目録』 『祐維記鈔』 『証如上人日記』 『大館常興記』 『永禄9年記』 『兼見卿記』	陵墓	陵墓	文明年間に畠山義就が河内守護所を置いて以降、天正3年(1575)の織田信長の攻撃による落城まで、若江城とともに河内支配の拠点として機能した。
9	平尾城	『通法寺別当実尊言上状』 『三刀屋文書』	宅地	遺構一部遺存	
10	河内源氏館	『通法寺興廃記』 『前太平記』	寺院	遺構不明	
11	二條麓城	『土居文書』	宅地	遺構不明	
12	石川城	『平家物語』 『太平記』 『吾妻鑑』	宅地	遺構不明	
13	上山城	『大ヶ塚由来略記』	荒地	遺構不明	
14	平石城	『平石城旧記』 『太平記』	山林	大規模 (100×200)	
15	多々良賽	『後太平記』	田	遺構不明	
16	半田城	『和田文書』	宅地	遺構不明	
17	津々山城	『新将軍南方進発事付軍勢狼藉事』 『太平記』	宅地	消滅	
18	龍泉寺城(嶽山城)	『園太暦』 『大乗院寺社雑事記』 『藤涼軒日録』 『経覚私要鈔』 『河内名所図会』 『太平記』 『後太平記』 『日野観音寺大般若波羅蜜多經奥書』	造成	消滅	太平記・応永7年(1400)写経本の奥書より、14世紀代の築城が考えられ、以降に畠山氏の抗争に使われたが、永正4年(1507)年以降に文献史料に登場しなくなる。
19	金胎寺城	『大乗院寺社雑事記』 『祐維記』 『厳助大僧正記』 『畠山系譜』 『河内名所図会』	山林	大規模 (200×260)	『大乗院寺社雑事記』にある寛正3年(1462)の記事に登場することから、15世紀中葉には存在していたと考えられ、その後、畠山氏の抗争に使われ、『祐維記』の大永4年(1524)の記事を最後に文献史料には登場しなくなる。
20	烏帽子形城	『経覚私要鈔』 『金剛寺文書』 『言経卿記』 『日本史』 『日本巡察記』 『多門院日記』 『後鑑』 『続応仁記』 『織田軍記』 『宇野主水日記』 『足利李世記』	山林	大規模 (160×140)	文正元年(1466)に「押子形城」として登場し(烏帽子形城としての初出は大永4年(1524))、以後に天正12年(1584)の記載に至るまで文献史料に登場する。
21	日の谷城	『南山巡狩録』	山林	遺構不明	
22	仁王山城	『和田文書祐維記』 『天野山金剛寺旧記』 『後鑑』	山林	遺構不明	正平6年(1351)の和田助氏軍忠状及び、『後鑑』大永4年(1524)9月条に登場。
23	国見城	『金剛寺文書』	山林	遺構不明	
24	楠木邸跡	『萩藩閥閥録』 『大乗院寺社雑事記』 『太平記』	田	埋没	
25	赤阪城	『楠木合戦注文』 『園太暦』 『愚管記』 『太平記』 『後太平記』	山林	遺構不明	
26	上河内城	『河内志』	山林	半壊	
27	楠木城	『楠木合戦注文細川頼之記』 『毛利家文書』 『太平記』 『後太平記』	山城	大規模 (280×260)	元弘2年(1332)に楠木正成が籠城し、幕府の攻撃により落城したことが知られる。これ以降の城史については不明。
28	吉年城	『吉川家文書』 『毛利家文書』	山林	遺構不明	
29	本宮城	『応仁記』 『応仁前記』 『後太平記』	山林・境内	遺構不明	
30	国見山城	『応仁記』 『応仁前記』	山林	大規模 (250×300)	
31	北山城	正慶2年『阿蘇治時感状』	山林	遺構不明	
32	千早城	『経覚私要鈔』 『楠木合戦注文』 『細川頼之記』 『南方紀伝』 『後鑑』 『若狭守護代記』 『太平記』 『後太平記』	山林	大規模 (300×400)	元弘3年(1333)に楠木正成が籠城戦を成功させたことが知られる。また、文正元年(1466)に畠山義就が大和から「千破屋城ノ間ヲ通テ」南河内へ進出している。
33	二上山城	『延元2年安満法橋了願軍忠状』 『紀伊統風土記』 『萩藩閥閥録』 『言経卿記』	山林	大規模 (250×200)	南北朝期に軍忠状に「二上城」の記載があり、天文10年(1541)に木沢長政が二上山に築城したとの記載があり、天文11年(1542)には当該城が焼け落ちたとする記載がある。



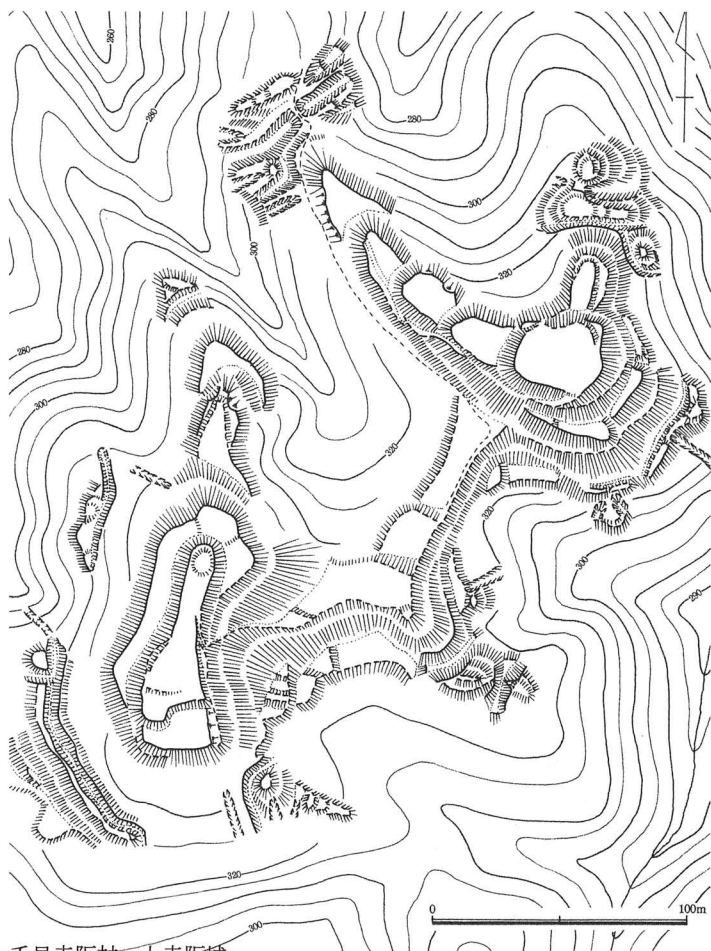
第47図 南河内地域城郭分布図（大阪府教育委員会2008より引用）



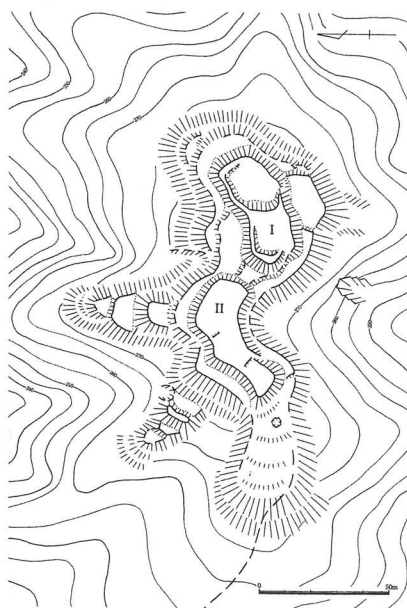
千早赤阪村 猫路山城



富田林市 金胎寺城

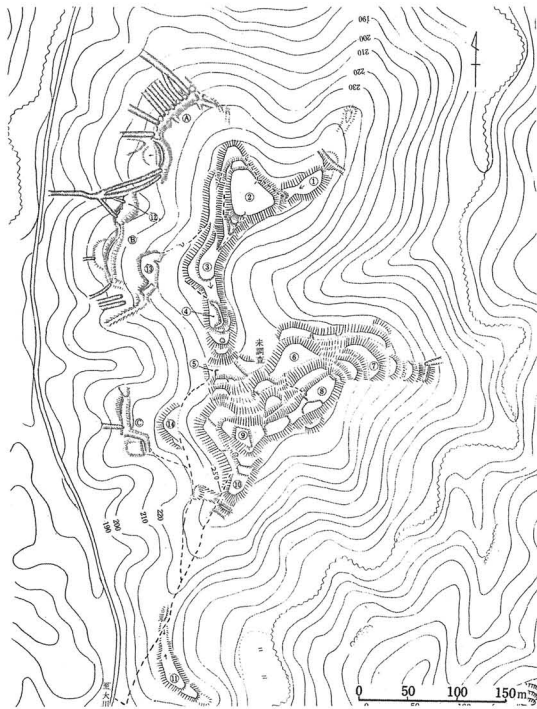


千早赤阪村 上赤坂城

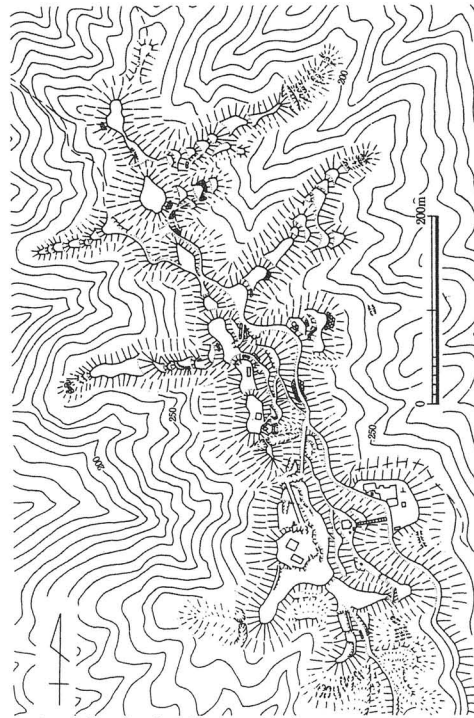


河内長野市 石仏城

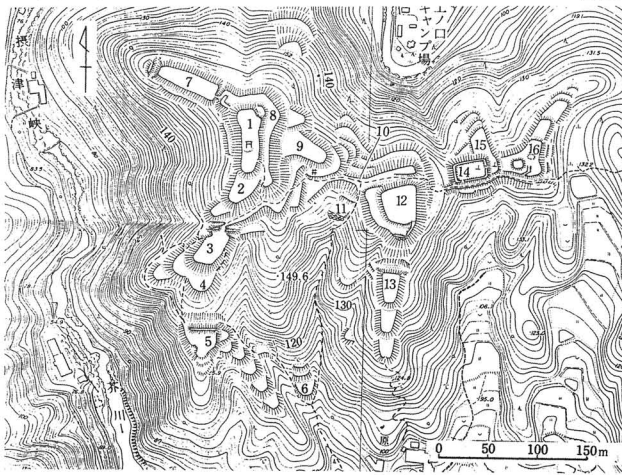
第48図 周辺の城郭 (1/3,000)



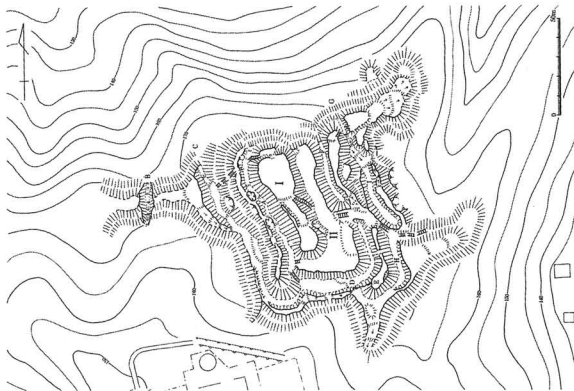
貝塚市 根福寺城



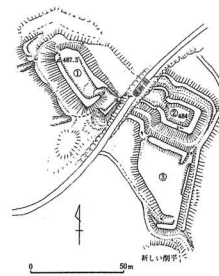
四条畷市 飯盛山城



高槻市 芥川山城



河内長野市 烏帽子形城



八尾市 高安山城

第49図 周辺の城郭（1/8,000、烏帽子形城と高安城は1/4,000）

輪を中心とするか、これを複数連ねるもので、堀切以外に顕著な防御施設をもたない簡易な構造のもの（旗蔵城、一番のきり城、杵形城、松山山城）がある。大規模なものは、主尾根に沿って細長く、主要な曲輪を配置するもの（二上山城、しょうぶ城）、主郭の周囲にのびる複数の尾根に曲輪を配置するもの（金胎寺城、石仏城、千早城）がある。また、主郭が明確化していない例もあり、国見山城は、中心部分が複数の小規模な曲輪に分かれており、上赤阪城は中心となる大規模な曲輪が2箇所存在する。

この点で、方形の曲輪を横堀・土塁で囲むのは、本城の特色である。横堀に関しては、高屋城、丹下城、小山城などの平地城館で見られるものであり、山城に導入される事例は稀である。南河内地域では、本城において発達した横堀が認められる以外に上赤阪城で南西隅角部のみに部分的にめぐっていることが知られている。

なお、当該地域は、我が国の内乱史を考える上で重要な地域であるにも関わらず、早い時期から都市化が進んだこともあり、多くの城郭が破壊されたと推測できる。この点で、本城は遺存状況が極めて良好であり、特に土塁、空堀などの遺構を良好な状態で観察することができる。

なお、大阪府下全体に目を移すと、高槻市芥川山城、四条畷市飯盛山城、貝塚市根福寺城、和泉佐野市土丸城、奈良県にまたがるが八尾市高安山城³⁹が、遺構の規模、遺存状況、文献記録の豊富さにおいて特質すべきものがあり、『中世城郭事典』でも紹介が行われている。これらの内、芥川山城、飯盛山城、根福寺城は尾根上に複数の曲輪を大規模に連ねるものであり、本城とは構造を大きく異にする。高安山城は、土塁・横堀を周囲に巡らし、本城に近い形状をとっている。

第7節 文献史料

南河内地域には、文献史料に登場する中世城郭も多く、南北朝の内乱で使われた赤坂城、千早城、室町時代に河内守護所であった高屋城、本城と並び両畠山氏の合戦で使用された嶽山城、金胎寺城等が存在する。

前節で述べたように本城に関する記載は、豊富な文献資料において確認されている。また、記載文献資料の種類も幅広く、①応仁の乱以降に行なわれた両畠山氏の抗争に関連するもの、②河内支配をめぐる三好氏と畠山氏の抗争に関連するもの、③信長上洛後の石山合戦・高屋城合戦に関連するもの、④豊臣秀吉による根来攻めに関するもの、⑤キリシタン関連のもの等が存在している。このような豊富な文献史料や周囲で展開された合戦の記録からは、第4章で検討を行ったように本城がどのような勢力によって使われ推移していったのか明らかになっており、かつ畿内での内乱史を理解する上で重要な戦場に多く登場している。また、キリシタン関連の史料に登場し、ヨーロッパにまで城名が伝えられたことは、本城の歴史的な重要性をよく示している。また、本書でV期とした織豊政権期の畠山氏滅亡後は、複数の領主が統治にあたっていたことが知られている。同様の事例は、三

好義継死後の若江城で見られ、織田政権による地域支配における一つの形態を示している。

なお、南河内地域において文献史料で存在が確認できる城郭は33例存在する。このように多くの記録が存在することは、南北朝期から戦国期にかけて多くの合戦の舞台となった事に加えて、当時の古記録が多く残されている京都・奈良に近いことを大きな要因としてあげることができる。

しかし、これらの中には、所在地がわからないものもあり、場所が特定されているものの現在城郭の遺構と考えられるものが地表面で観察できないもの、陵墓となり内容の詳細が不明なものもある。大規模な曲輪やその他の防御施設が地表面で観察できるものは、本城跡以外に、平石城、金胎寺城、上赤阪城、国見山城、千早城、二上山城がある。

第8節 まとめ

本城が位置する南河内地域は、南北朝、応仁の乱、戦国時代にわたって、大規模な戦場となっており、文献史料にも登場する城郭が存在し、我が国の内乱史を理解する上で重要な地域であるにも関わらず、国の史跡となっているものは戦前において楠公関連史跡として指定を受けた千早赤阪村の赤阪城、楠木城（上赤阪城）、千早城の3例のみである。当然、これら以外に我が国の歴史の理解にとって必要不可欠なものも多く存在している。本城についても、このような事例の内の一つであるといえる。

本章で評価を行ったように本城は、周囲にある他の城郭に見られない特徴が複数の要素にわたって認められる。特に、主郭をめぐる巨大な横堀・土塁は、周囲の城郭で類例がみられるものではなく地域内で発達したものと考えることができないものであり、国人層ではなく、より上位権力の介在によって築城されたと考えられる。

また、発掘調査によって検出された建物は全国でも類例の少ない中世山城における礎石に瓦葺建物であり、城郭発達史を理解する上で重要である。なお、改修痕跡、堀内障壁が確認されていることによって、本城の変遷や詳細構造も明らかになりつつある。

豊富な文献史料によって城の来歴の把握ができることも重要であり、特に応仁の乱以降に展開された畿内の重要な合戦記録に数度にわたり登場している。特に、織豊政権期の記録は豊富であり、特徴的な地域支配も行なわれていたことがあきらかとなっている。

このようなことから、本城跡は畿内における内乱史を理解する上で重要であり、現在観察できる城跡の構造、文献から窺うことのできる織豊期における地域支配のあり方の両面において中世から近世への過渡的な様相をよく示している事例である。

また、遺存状況が極めて良好であり、周囲に残された同時期の歴史遺産の存在を含めて内乱の歴史・中世史を学習する重要な教材となりうるといえる。